

有用感を持つことができる研修の在り方

－若手教員研修の実践を通し－

古河市教育委員会指導課指導主事

角 田 実

抄録

本実践は、経験年数1年から4年までの教職員（若い芽研修）と、経験年数7・8年（中堅職員研修）の2つの研修会の実践記録である。2つの研修会は別々の研修会であるが、年間に数回行われる研修会のいくつかは合同の研修会とし、相互の交流を図ることができるよう企画した。また、研修に意欲をもって参加でき、日々の実践に役立つ研修にしたいと考え、受講者のニーズをつかみ、主催者側の意図との間で折り合いをつけ、かかわりを増やすために小集団の研修を基本とした、継続的な研修を企画することによって、互い（主催者側と受講生）に有用感を持つことができる研修となった。

キーワード：有用感、継続性、かかわり、若手教員研修

1 目的

受講生が有用感を持ち、教育実践役立つ若手教員研修の在り方を探る。

2 研修の内容

(1) キーワードに関する基本的な考え

有用感：そのよさを認め、肯定的に受け止めることができる実感。本論では、充実感、満足感等を包括した実感を有用感ととらえる。

継続性：本論では、6段階の研修（図1、R1～6）を計画し、主催者側及び研修参加者相互が継続的にかかわる場を設定した。本論ではその時系列の流れとそれぞれのつながりを継続性ととらえる。

かかわり：主催者と研修参加者、研修参加者相互、また研修に参加していない他者（新規採用研修担当教員等）との関係も含め、研修の中で生じる関係性（指導、話し合い、交わり、つながり等）を本論では、「かかわり」ととらえる。

若手教員研修：「(2) 研修の概要」参照。

(2) 研修の概要

研修の概要は図1に示したとおりである。若手教員研修は、平成16年年度と17年度の2年間、古河市総和地区（合併前は旧総和町）で実践した研修である。平成17年度は、初任者の数が多くなったため、初任者から3年次までの教員を対象に実施した。中堅職員研修は、7、8年次の教員を対象とした研修である。図1は、17年度に実施した概要であるが、16年度もほぼ同様であったため、一部修正を加えながら、各年度の実践で詳細に述べる。

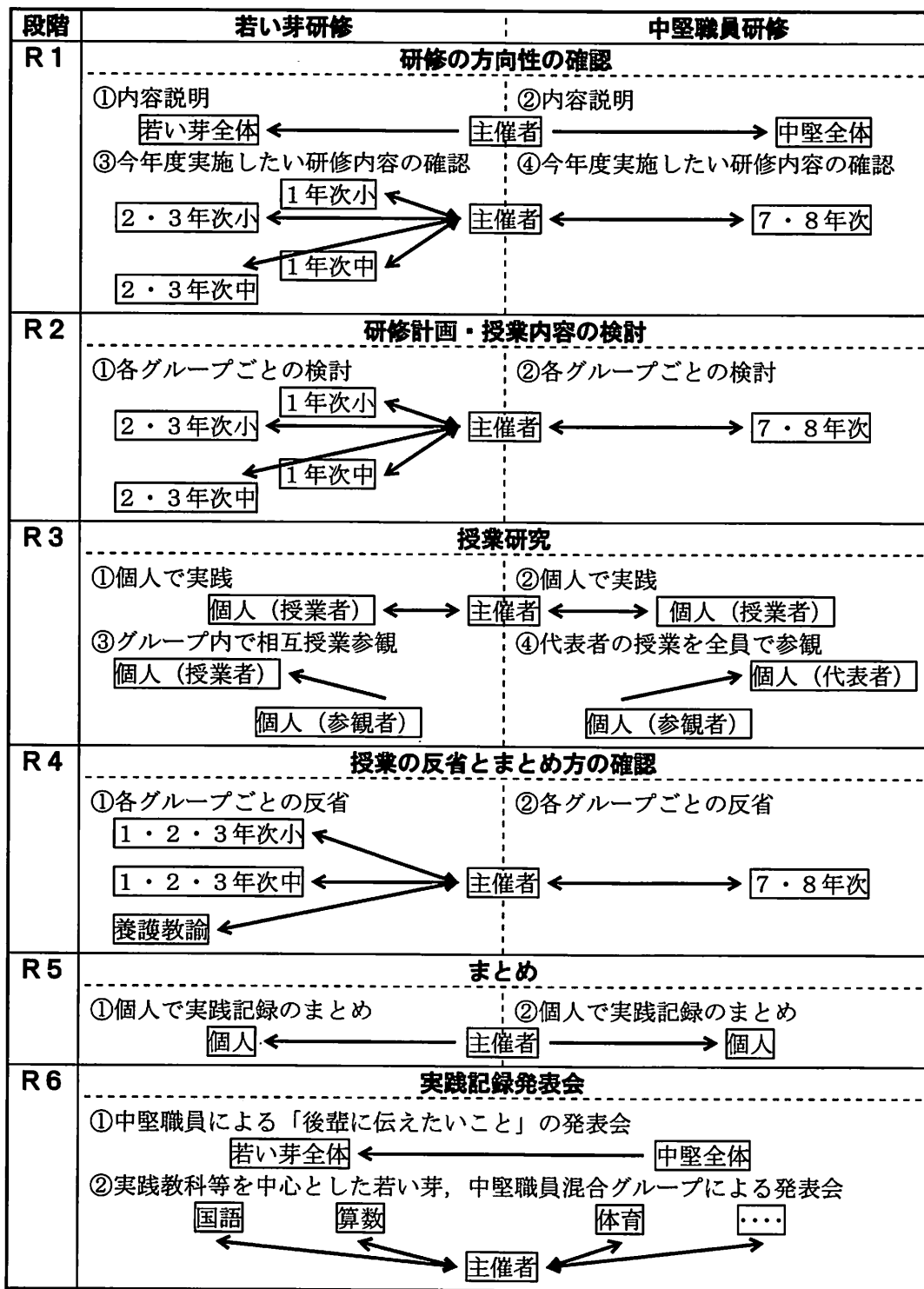


図1 研修の全体構想図

※図左端のR 1～6は、研修の段階を時系列で示したもの

※図中の○印数字は、かかわりの場面、矢印はかかわりの方向性を示したもの

※1・2・3年次小、1・2・3年次中は教職経験が1年から3年までの小学校勤務の受講者のグループと中学校勤務の授業者のグループ、7・8年次は教職経験7～8年の小学校及び中学校勤務のグループ、養護教諭は教職経験1～3年までの小学校及び中学校勤務の養護教諭のグループを示したもの

図1との対応	主な研修内容	研修内容の詳細
段階→R1	省略	
段階→R2 (9月7, 8日に小学校と中学校グループにおいて実施)	<ul style="list-style-type: none"> 研修計画, 授業内容の検討 ビデオをもとにした授業分析の方法確認 	<ul style="list-style-type: none"> 中間まとめをもとにしたグループごとの研修計画と授業内容の検討。その後共有化を図るために各自の良い点を全体で確認。 ビデオの撮影方法と分析の仕方について確認。
かかわりの場面	省略	
段階→R3 (9月～11月中に各自が授業研究を実施)	<ul style="list-style-type: none"> 授業研究 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の計画に従って授業研究を実施。ビデオ撮影者(参観者)を学校に1名要請し授業を記録。 授業の反省は、当日または後日日程を調整して実施。参観できない場合はビデオを見てコメントを返す。
かかわりの場面 →①, ③ ※平成16年度は校内のビデオ撮影者のコメントを授業者に伝える。	<p>①個人で実践 個人(授業者) ↔ 主催者</p> <p>③撮影者からのコメント 個人(授業者) ← 他者(ビデオ撮影者)</p>	<p>授業の反省は、放課後実施。時間節約のため、事前に資料を用意して指導。参観できない場合はビデオを見て指導。</p> <p>当該校のビデオ撮影者から、授業のコメントを伝える。</p>
段階→R4 (12月20, 21日に小学校と中学校グループにわけ実施)	<ul style="list-style-type: none"> 実践記録のまとめ方の確認 授業中の教育相談的なかかわり方の研修 	<ul style="list-style-type: none"> ビデオをもとにした授業の感想を発表し合い、実践記録のまとめ方のポイントを確認。 教育相談で内地留学を終えた教員の授業のビデオをみながら、教育相談的なかかわり方とその効果を確認。
かかわりの場面 →①, ※ ※平成16年度は①の他に、内地留学(教育相談)経験者の授業をビデオに撮影し教育相談的なかかわりについて研修	<p>①各グループごとの反省 1～4年次小 ↔ 主催者 1～4年次中 ↔ 主催者 養護教諭 ↔ 主催者</p> <p>若い芽全体 ↔ 主催者 他者(授業実施者) ← 若い芽全体</p>	<p>ビデオを使って振り返った授業の感想をもとにグループごとに授業の改善点について話し合う。</p> <p>教育相談的なかかわりの部分について、意見交換し合う。授業者が作成した資料を基に話し合う。</p>
段階→R5	省略	
段階→R6 (2月22日に中堅教員と合同で実施)	<ul style="list-style-type: none"> 「後輩に伝えたいこと」の発表 グループごとの実践記録の発表 	<ul style="list-style-type: none"> 中堅職員全員から「後輩に伝えたいこと」を聞く。 校種, 教科等が違っていると自分との比較ができないという昨年度の反省を生かして、実践教科等を中心とした若い芽, 中堅職員混合の小グループごとで発表。
かかわりの場面 →①, ②	<p>①中堅職員による「後輩に伝えたいこと」の発表会 若い芽全体 ↔ 中堅職員全員</p> <p>②実践教科等を中心とした若い芽, 中堅職員混合グループによる発表会 国語 ↔ 主催者 算数 ↔ 主催者 体育 ↔ 主催者 … ↔ 主催者</p>	<p>中堅職員が、教科指導や、学級経営、教師としての生き方、仕事と家庭との両立等の内容を資料をもとに発表し、若い芽研修参加者は、コメントを記入して返す。</p> <p>各グループごとに実践記録を発表し合い、コメントを返す。主催者は、グループに入り、質問等しながら指導する。</p>

図2 平成16年度若い芽研修の実践内容

※ () は、かかわりについての説明

(3) 研修の方向性

受講者のアンケートの結果、平成15年度までは、実践を論文にまとめる研修であったため、日々の授業実践に役立つ研修をしたいという希望が多く出された。また平成16年度の第1回研修会（図1，R1-④）では、8年次の先生から「今年は最後なので何か違った研修をしたい。」「学校に同じ年代の先生が少ないので、お互いの授業を参観したり、学級経営について話し合いたい。」「何か先輩として後輩に伝えたい。」等の意見が出された。ことから次の研修の方向性を確認した。

表1 若い芽，中堅職員研修の方向性

①主催者とのかかわりだけでなく、研修参加者相互のかかわりを増やす研修を仕組む。
②学校関係者や新採指導教員，ベテランの養護教諭等との連携をはかりながら，研修を仕組む。
③全体での研修を少なくし，少人数のグループ研修を増やす。
④1回の研修時間はできるだけ短い時間（1時間程度）とする。
⑤個別の指導は，可能な限りに，メール，ファックス等で行う。
⑥グループごとの相互授業参観を実施する。

(4) 平成16年度の実践

研修の方向性をもとに，連続して研修の機会を設定することで，若手教員及び中堅教員の研修を進める上での迷い，揺れに対応でき，また相互の定期的な交流も図ることができると考え，6回の研修を計画し実践した。

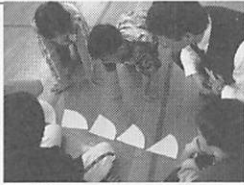

図1との対応	主な研修内容	研修内容の詳細
段階→R2 (8月30日に実施)	・学級経営の課題	・学級経営の課題等を話し合う。
かかわりの場面 →②	②各グループごとの検討 主催者 ←→ 7・8年次	相互にそれぞれの課題を話し合う。主催者も積極的に話し合いに加わり，学級経営についてのアドバイスをする。
段階→R3	※省略	
かかわりの場面 →④ ※②は省略 ※平成16年度は相互授業参観を実施	④相互授業参観 個人(授業者) ←→ 個人(参観者)	参観者は授業参観後，話し合う時間がとれないため，紙面でコメントを伝える。
段階→R4 (12月22日に実施)	・授業中の教育相談的な かかわり方の研修	※省略 
かかわりの場面 →②	②各グループごとの反省 主催者 ←→ 7・8年次	相互授業参観のコメントをもとにそれぞれの授業を振り返り，成果や課題を確認。

図3 平成16年度中堅職員研修の実践内容

※  は，かかわりについての説明

ア 若い芽研修（1～4年次）

この研修は、テーマを決めそれに基づいた授業を実施して、実践記録をまとめる研修である。（図2参照）

イ 中堅職員研修（7・8年次）

平成16年度は相互授業参観を中心に実施し、さらに「後輩に伝えたいこと」というメッセージを若手教員に送る内容に変更した。（図3参照）

(5) 平成17年度の実践

平成17年度は、基本的には16年度と同じであるが、16年度の改善点をふまえ、平成17年度の方向性（表2）を決定した。また平成17年度は、授業研究以外の研修として表3に示す研修も各グループの話し合いをもとに計画した。

表2 平成17年度若い芽、中堅職員研修の方向性

①グループごとの相互授業参観や、先輩教師の授業を参観する機会を設定する。
②新採指導教員、ベテランの養護教諭等との連携をはかりながら、研修を仕組む。
③少人数のグループ研修を増やし、相互に話し合う時間を多く設定する。
④グループ、個人のニーズにあった研修を設定する。
⑤実践記録集を充実させる。

表3 平成17年度各グループの授業研究以外の研修

グループ名	内 容
1年次小	○同じグループで相互授業参観を行う。
1年次中	○同じグループで相互授業参観を行う。 ○一つの中学校に訪問し、それぞれの専門教科と道徳、特別活動の授業参観をする。
2・3年次小	○同じグループで相互授業参観を行う。 ○市内の国語、算数、体育、図工のベテランの先生の授業参観をする。 ○初任者研修時の指導教員の指導を受ける。
2・3年次中	○市内の同じ教科のベテランの先生の授業参観をする。 ○小学校の同じ教科の授業参観をする。
7・8年次	○情報教育機器を利用した授業の在り方を研修する。（代表者の授業を全員で参観）
養護教諭	○保健室経営に関する課題等について、ベテランの養護教諭の指導を受ける。

ア 若い芽研修（1～3年次）

平成17年度は表4の内容を新たに加え、授業研究を2回実施し、授業改善のための課題を明確にする研修を実施した。（図4参照）

イ 中堅職員研修（7・8年次）

平成17年度は、表3に示す内容を新たに加え、情報機器の活用を共通課題として、研修を実施した。（図5参照）

図1との対応	主な研修内容	研修内容の詳細
段階→R3 (10月～12月中に各自が授業研究を実施)	・授業研究	・1年次は、1回授業を公開し、県の新採研修に沿ったまとめ方をする。2・3年次は、2回授業を計画し、1回目の授業と2回目の授業を比較検討し、実践記録をまとめる。養護教諭は、保健室指導に関する課題研究を行い実践記録をまとめる。
かかわりの場面 →①, ③	①個人で実践 個人(授業者) ↔ 主催者 ③グループ内で相互授業参観 個人(授業者) ↔ 他者(新採担当教員等) ↑ 個人(参観者)	主催者は、2回の授業のうちどちらかを参観し、放課後コメントをする。 参観者は、紙面でコメントを返す。他者は日程を調整し、指導にあたる。
段階→R4 (12月12, 15, 20日に小学校と中学校、養護教諭グループにわけ実施)	・授業の反省と実践記録のまとめ方の確認 ・先輩の養護教諭からの指導	・持参した資料をもとに授業の反省とまとめ方をグループごと実施。 ・養護教諭グループは、小, 中の先輩養護教諭の保健室を訪問し、指導を受ける。
かかわりの場面 →① ※養護教諭のかかわりのみ。他は省略	①各グループごとの反省 養護教諭 ↔ 主催者 ↓ 他者(先輩養護教諭)	各自が質問事項を持参し、先輩養護教諭から回答やアドバイスをもらう。主催者は、質問をしたりしながら両者にかかわる。

図4 平成17年度若い芽研修の実践内容

※ () は、かかわりについての説明

図1との対応	主な研修内容	研修内容の詳細
段階→R3 (10月～12月中に各自が授業研究を実施)	・授業研究	・7・8年次は、情報教育機器を使った授業を公開し、実践記録にまとめる。授業公開は代表者一人の授業を全員で参観し、他は主催者のみ参観。他に「後輩に伝えたいこと」をまとめる。
かかわりの場面 →②, ④	②個人で実践 個人(授業者) ↔ 主催者 ④代表者の授業を全員で参観 個人(代表者) ↔ 個人(参観者)	主催者は、全員の授業を参観し、放課後指導。 参観者は、紙面でコメントを返す。
段階→R4 (12月16に実施)	・授業の反省と実践記録のまとめ方の確認	・持参した情報機器を活用した資料(プレゼンソフトで作成した資料)を見合い、授業の反省を実施。

図5 平成17年度中堅職員研修の実践内容

3 研修の成果と課題

(1) 平成16年度の実践から

ア 若い芽研修(1～4年次)

若い芽研修では、ビデオで自分の授業を振り返るといった研修のスタイルを身につけてもらいたいために、ビデオを使った授業分析の方法を取り入れてみた。表4に示したとおり、授業中の視線、話し方等授業の基本的な部分について振り返ることができ、受講者がそれぞれの授業改善の視点を持つことができた。課題として、分析の視点が明確でなかったため、表面上の授業改善の視点しか持つことができない受講生もいた。

また、受講者のニーズがあったにもかかわらず、相互に授業を参観する機会を設定することができなかった。

イ 中堅職員研修（7・8年次）

中堅職員研修では6人の受講者の自主性を尊重して、研修スタイルを大幅に変えた。特に「同じ学校には同世代の先生が少ないので同じ世代の先生達ともっと話をしたい。」という願いを取り入れたため、研修会では、活発な意見交換がなされ意欲的な研修となった。受講生の研修に対するニーズをもとに研修を計画した成果がみられた。また、中堅職員の研修から他の教師の実践を見て学ぶことの重要性を実感できた。最近では1つの学校の教職員数も少なくなってきたり、同世代の教員も少ないため、楽な気持ちで授業を見せ合うことができなくなってきた。そのデメリットを解消するのが主催者側の役目であることを再確認できた。

表4 アンケート（ビデオを見た感想）から

- 全員をまんべんなくみているようであるが、実際は手のかかる子に多く声かけをしている。
- 声のトーンを変えることによって、子どもの視線が集まったり、注意を喚起させることがわかった。
- 自分の教え方のくせや授業中にみることができなかった子どもの表情などがわかり、……。
- 教室での歩き方、立つ位置など、自分では気が付かない点がたくさんあった。
- 私の声が教室に響き、生徒の発表はほとんどききとれなかった。
- 授業のテンポが早く、生徒がついてきていないという状況をビデオをみることによって改めてわかりました。
- 自分の説明の長さが嫌になりました。
- ビデオとるということで、逆に自分の欠点を意識し、ゆっくり話すことができました。
- 話し方で授業のリズム、テンポもつくられていくのだなあと思いました。

※ 06'2.22 実施したアンケートより抜粋

(2) 平成17年度の実践から

ア 若い芽研修（1～3年次）

平成17年度は、特に新採指導教員、ベテランの養護教諭、かつての新採指導教員との連携がうまくいった。小学校の新採担当指導教員とは、互いに連携して相互授業参観を実施し、主催者側のコメントと指導教員のコメントを合わせて伝えることができた。また副次的な成果として、担当教が体育専門であったため、他の2・3年次の受講者の体育の授業もコメントをもらうことができた。ベテランの養護教諭との連携では、受講者に養護教諭が4人おり、養護教諭の専門性を生かした指導を受けることができた。かつての新採指導教員との連携では、3年次のグループが新採時の指導教員に授業を見てもらった研修を計画し、2年間の成長を確認することができた。課題として、相互授業参観が多くなったため、研修に参加した受講生や連携を図った他の教員の多忙感を招いたことは否めない。

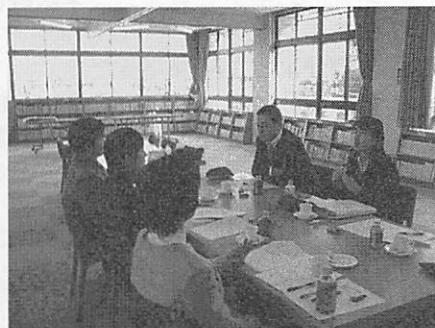


写真2 グループ研修の様子

イ 中堅職員研修（7・8年次）

平成17年度は、昨年度の成果であった自主性を尊重したことによる研修意欲の高まりを今年度も期待して、研修内容を全て受講生に決めさせた。その結果、校種（小1人、中3人）が違う等から共通のテーマ「情報機器の活用」（全員がプレゼンテーションソフトを使った教材づくり）を決め実践に取り組んだ。段階：

R4の研修では、それぞれの授業で使った教材を見せ合いながら、授業の中身も話し合った。プレゼンテーションソフトを使った教材の作り方情報教育に関することも話し合われた。課題として、この研修は例年参加者の校種及び教科等がまちまちであるため共通テーマを決定するまでに時間を要することである。

(3) キーワードの視点から

ア 有用感

有用感を持つことができたかと判断した受講者のアンケート（表7）で示したとおりである。主催者側としては、受講者のアンケートや毎回研修に参加する受講生観察をとおして、有用感を持って研修に参加していたと判断したが、有用感を持つことができたかどうかを判断する資料として、もっと多面的にかつ継続的なアンケート等が必要であった。この点が今後の大きな課題である。

表5 有用感をもつことができたかと判断できる受講生の感想

- 授業をみてもらって直接指導してもらうことは自分にとって大変貴重なこと。
- 昨年度からの継続研究（2,3年次）ということで、さらに深めることができた。
- 研修をすることによって、養護教諭が授業に参加するよい機会となった。
- 他校の先生方と顔をあわせ情報交換もでき、また先生方からもあたたかい言葉をもらうことができたのでとてもいい研修……。
- 論文を書く際に、（主催者から）資料をもらうことができたので、大変参考になった。口頭で指導を受けるだけでなく、具体的な例を示してもらったことがよかった。
- 昨年度までの研修と違い、相互授業参観があったのでよかった。
- 同年代の先生と授業について意見交換し合い、よりよい授業づくりにしていくことは、今後の研修でも続けて欲しい。
- 後輩に伝えたいこと（7・8年次の活動）をかくことによって、また原点に立ち戻り、共にがんばることができる同志がいることを改めて感じることで大変よかった。
- お互いの授業を見学し、学級経営や掲示物等を含めて参考になりました。7・8年次として本当に実のある研修……。
- 血のかよった研修だった。
- 日々の仕事に追われ、こういう機会がなければなかなか振り返ることができないので……。
- この研修を通して「こだわり」を持った授業をすることができた。
- （養護教諭）希望通りベテランの養護教諭の保健室参観と事例検討会をすることができとても充実した研修……。

※ 06'2.22 と 07'2.16 実施したアンケートより抜粋

イ 継続性

かかわりとの関連で見ると、回を重ねるごとにかかわりが深まってきた。これは当然のことであるが、1回の研修時間を短く、それを継続することで受講者の負担感も少なく有用感を持つことができたのではないかと考える。しかし、このことについてアンケートをとっていなかったため、検証するための資料が乏しいことが課題となった。

ウ かかわり

研修は主催者（指導主事）から学ぶこともあるが、相互に学び合うことの大切さを重視し、研修の中に双方向のかかわりを仕組んできた。その結果、継続性との関連で見ると回をかさねるごとに、話し合いが深まり、熱中して設定した時間を超えてまで話し合いをする姿がみられた。研修で大切なことは、講話も必要で

あるが、受講者が相互にかかわる場を設定することでより効果的な研修になることを主催者として確認できた。表6に受講者の感想を示す。

表6 かかわりを通して有用感をもつことができたと判断できる受講生の感想

- 先輩の先生と対話をすることで「自分の授業をこうしていきたい」という気持ちを持つことができた。
- 7・8年次の先輩の先生方の話はとても貴重で、自分自身へのいましめになり、勇気づけられた。
- (3年次の受講生)初任研の時以来、同じ教科の先生とじっくり話のできたのでよかった。
- 他の先生たちと話す機会が多い研修だったので、自分以外の先生の考えがわかり、力をもらった。
- 同じ年代の先生方と出会えて同じような悩みや思いを共有することができうれしかった。
- 授業では相互授業参観をしたことによってたくさんの先生方からアドバイスをもらい……。
- (2年次の受講生)一年目の先生方のすばらしい研修をしていて、このままではだめだと焦り、……。
- 他の教科の先生方と「情報機器」ということを共に考え授業に生かすことができました。
- 中学校の数学担当者と話すことができ、小中のつながりを考えることができました。
- (養護教諭)小学校のベテランの先生の話から自分の質問したことに親身になって耳を傾けてもらいアドバイスもたくさんもらいました。
- グループの研修では中学校の先生と同じグループだったので、中学校の取り組みが新鮮に感じ……。
- 他校の先生方の使命感をもち取り組んでいる姿は大いに刺激となった。
- (主催者から)一人一人にコメントをもらったことはうれしかった。
- (初任者)センターと町の指導主事両方から指導してもらったことが大変勉強になった。

※ 06'2.22 と 07'2.16 実施したアンケートより抜粋

エ 若手教員研修

若手教員研修は、「鉄は熱いうちに打て」「何事も最初が肝心」等のことわざにもあるように教員になりたての数年間研修を継続していくことは、このことわざにぴったりである。集中して研修して身に付くものと、継続的に研修して身に付くものがあり、継続して研修していくことの有効性を主催者として確認できた。

また中堅職員(7・8年次)にはそれなりの出番をつくり、生かす研修も必要である。学校によっては、7・8年次といっても「学校で一番若い」場合もある。先輩から学ぶことも大切だが、後輩に指導しながら自分の資質を高めることも大切であると考え。その点からみてもこの研修は有効であることがわかった。

4 おわりに

おわりにとして、17年度の最後の研修会的主催者の話(1)と、指導主事の研修会で研修について話し合う機会があり、その時の先輩の指導主事からの話(2)で締めくくりたい。

(1)「私(主催者)の仕事は広範囲であるが、この仕事が一番楽しい仕事である。それは意欲のあるあなた達と一緒にいるだけで私もやる気がわいてきて、心地よい気持ちになる。どうぞ何年たっても自ら学ぶ意欲を持ち続けてほしい。」

(2)「自分たち(指導主事)は、自分なりの考えで研修を進め、それで満足しているが、受講生と同じ足元に立たないと本当の研修ができない。その意味でこの研修(本研究の实践)は、受講生にとって役に立ち、本心から『参加してよかった』と思える研修になったのではないか。」

参考文献

- 1 吉崎静夫著（1993）『教師の意思決定と授業研究』株式会社ぎょうせい
- 2 群馬県教育研究所連盟（1996）『実践的研究のすすめ方』東洋館出版社
- 3 二杉孝司・藤川大祐・上條晴夫著（2002）『授業分析の基礎技術』学事出版
- 4 藤原久雄（2000）『総合学習であるライフスキルトレーニング』明治図書